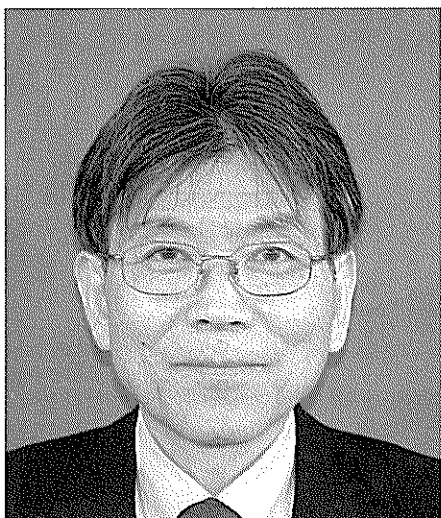


新医学部長インタビュー

New medical school president interview



佐賀大学医学部長
瀨崎 雄平

●経歴

本籍は鹿児島県で、焼酎の富乃宝山で有名な西酒造がある日置郡吹上浜の近くがルーツです。ただ本籍が日置郡というだけで、実際は鹿児島県には住んだことがありません。父親の勤務の関係であちこちを転々とし、高校を卒業したのは福岡市でした。理科が好きで夏休みは昆虫採集に明け暮れている子供でした。とりあえず自宅から通学出来るという理由で九州大学を受験しました。医学部進学の際には生物系が好きだったので生物系の研究ができて生活ができたかと漠然と考え、また、生活もしないといけないなあと考えて、医学部に進学しました。

●学生時代の思い出・部活など

学生時代は写真部と卓球部に入っていました。写真部は全学のクラブで、いわゆる主に社会派の活動をやっていました。た

例えば、無医村、過疎の村、公害問題を写真を通じてアピールして問題提起しようという活動です。部活ですから個人の活動だけではなく、グループに分かれて泊まり込みで合宿し、写真をとり、今というテーマを繰り返して、組写真を作成して発表するという活動をしていました。デジタルカメラに移した現在では役に立たなくなりましたが、ここで習得した現象焼き付けの技術にはその後随分助けてもらいました。卓球部は医学部での部活です。こちらは卓球を無料でできるというくらいにの気持ちで参加して、好きでしたが、ちつとも上手になりませんでした。

●趣味

趣味は写真と読書です。今はほとんど記録という意味以上の写真を撮っていません。学生時代には中古でも手になかった Nikon を医学部を卒業して、自分で稼げるようになってすぐ

に購入し、15年くらいはどこに行くにも Nikon の一眼レフに広角・望遠の交換レンズを持って歩いていたが、40歳の頃に腰痛を患って以来重たい機材を持つことができなくなり、今はデジタルのコンパクトカメラしか使用していないような状態です。腰痛の再発を気にしなくてよい時期が来たから写真は是非再開しようと思っています。

●なぜ医者を目指したのか

自分の家庭環境で医師になれるとは思っていませんでした。医学部に進学した際に、きちんと勉強して医師にならなければと思ひ、勉強は真面目にしたと思います。6年間で、ペーパーテストでは教養部で選択科目の西洋史がひとつ落とされたのみです。歴史はとも興味があり、真面目に出席しノートもきちんととっており、試験もきちんと書いたつもりでしたが落ちていて、愕然としたことを今も覚えています。試験前に私のノートを借りていった同級生はすべて合格していて、40年経過後にあとも釈然としていません。5年と6年の夏休みには小児科病棟に入り浸っておもに CHD (慢性心疾患) の患児を対象に実習をしていましたので迷わず小児科に入局し循環器を専攻しました。

●座右の銘

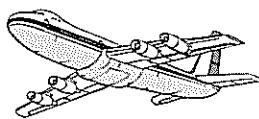
座右の銘というのはないのですが、若い頃から好きな言葉は、幸運の女神は後ろ髪を持たない」という言葉です。それと他の人の言葉で同感できるのは「No Challenge No Chance」でしょうか。年齢を重ねるとこれらの言葉を忘れそうになりますが、自らチャンスをつくる、また、たまたま訪れたチャンスを逃さないということをお忘れずに自分自身も生きたいと思っています。

●学生へのメッセージ

医師として患者さんに接していると、患者が医師・看護師に望んでいることは、ただひとつ、自分の病気をきちんと診断して治療してくれる医師・看護師であるということです。医学部を卒業したのちは非常に広い分野で活躍する可能性が開けていますが、まず学生さんには最初の目標として佐賀大学医学部の理念にあるように知識と技術をきちんと身につけて、患者さんのニーズに対応出来る「良医」「良い看護師」になることをめざしてもらいたいと思います。その基盤に立脚して研究や社会的分野で活躍する人材が幅広く佐賀大学医学部から輩出できれば素晴らしいことです。(北島・川良)

海外留学

有働 和馬



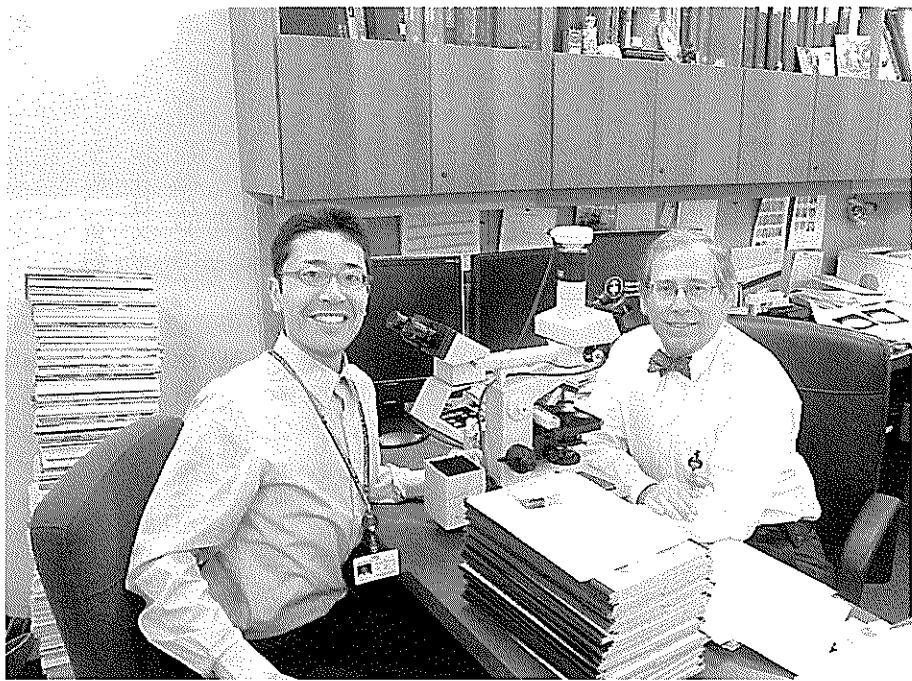
2008年9月より、ニューヨークの Memorial Sloan-Kettering Cancer Center にて、泌尿器科リサーチフェローとして勤務しています。佐賀医大を卒業後、泌尿器科に入局し、5年目から大学院に進学しました。機会に恵まれ、泌尿器科の魚住先生、徳田先生のご高配を賜り、大学院を休学して留学しました。

室、いわゆるラボで実験データを出す、というものと少し異なっています。泌尿器科のフェローですが、病理部に仕事場があります。ここで前立腺全摘標本の tumor banking を主に行い、その病理データを利用して臨床統計学的な研究を行っています。その他、講義に出席したり、手術見学に行ったりしています。日本ではまだ少ないロボット手術が盛んで、勉強になります。こちらに来て感じることは、アメリカでは分業化が進んでおり、効率が良いということです。臨床研究においては、検査値や術式など患者のデータはデータマネージャーが管理し、一覧表をもらうことができますし、統計的解析は泌尿器科専門の統計学者に委ねられます。日本でも見習ってほしい所があるかもしれません。ただ、環境はい

ものの、自分の研究を進める上ではなかなか苦労しました。英語はもちろん、泌尿器科の知識、統計用語や解析方法、病理診断など、あらゆる面において力不足を痛感しています。留学の前に日本でやるべきことがまだまだありました。ここにはスペイン、フランス、インド、ブラジルなど、世界中からフェローが集まっていますが、みな賢く英語も流暢です。他国の医師と対等に渡り合える、業績を上げられるか否かは、日本での準備次第といっても過言ではないと思っています。

機会があれば若い皆さんにはぜひ留学を経験していただきたいと思ひます。いい論文が書ければそれに越したことはありませんが、異文化の中で生活し、日本以外の医療や研究の現場を見るだけでも貴重な経験になると思ひます。

最後に、人手不足の折また大学院在学中にもかかわらず、快く留学を許可してくださいました魚住先生、病理学の戸田先生にこの場を借りてお礼申し上げます。



最後に、人手不足の折また大学院在学中にもかかわらず、快く留学を許可してくださいました魚住先生、病理学の戸田先生にこの場を借りてお礼申し上げます。

棟巡り

第6回



神経内科 雪竹 基弘 先生

恒例となりましたこのコーナー、今回は神経内科の講師でいらつしやいます。雪竹基弘先生にお話を伺ってきました。

— よろしくお願ひします。まずは、先生が神経内科を専門に選ばれたきっかけはなんですか？

僕たちの時代は今と違って、卒業時に内科か外科かといったことを決めていました。僕は、自分は内科かなと思っていました。気分転換に外の景色を見ることができるといいな、と思って仕事が良いな、と思ってからです。あと自分の集中力は30分が限界かなと。それで、内科を選びました。

3年目に専門を決めるとき、せっかくならより内科的なものにならうと決めていました。内科だけである程度できる所にしようと思つたんですね。もちろん、その当時からチーム医療っていうのはありました。だから当然どこかで先生の協力っていうのは必要なんですけど。それでも内科医として最大限、力が発揮できる方がいいなと。それで血液か神経かに絞りました。

— その他で神経を選んだのは、その場で臨床診断をつける努力をするからですか。神経内科では、話をしっかり聞いて、ちゃんと診察することで検査結果などに頼ることなく暫定的な臨床診断をつけるようにします。

— それは、どういうことですか？

神経内科では、Sto diagnosis という過程があります。まず、解剖学的な診断をつける。どこが悪いのかっていうことですね。大脳が悪いのか小脳なのか脊髄なのか筋肉なのかということ。それから、etiological 診断。病因学的な断言。病因学的な断言は、発症の経緯だとか症状だとかから、どういふ原因がありますよということ。そして、最後にそのふたつを絡めて臨床診断をつけます。大脳の障害ですとか、筋肉の病気でよとか、そういうふうなんです。あとはMRIなどの精密検査で答え合わせっていう形になります。患者さんが診察室に入ってきてから出て行くまでの間に暫定的とはいえ診断をつける。それは内科医として、一つの魅力だと思

— 他に仕事上のやりがいは何ですか？

— 地域と密接にやっていると、患者さん本人が自分の疾患を受け入れられるように接していくのも治療だと思うんですね。「自分自身の体だからそんなにきつくあたらんでもよいでしょう」という接し方。でも、大学の医師としては、在宅医療など密接には立ち入れない。だから、かかりつけの先生と連携していきま

— そうですね、つらいですよ、そういう患者さんを見るのって、すごくつらい。ただ、その中で勉強できることがたくさんあります。楽しいって

— 地域としての大学の役割があるんですね。

— ええ、もちろん。それに、医療だけじゃない。行政と一緒にやっていくことも多いです。県として、あるいは保健所として関わってくる人もいます。なので、つながりをつくって、うまくコーディネートしていかないと。この辺りはやはり内科ならではのじゃないかな。

— 医局はどのような雰囲気ですか？

— 楽しいですよ。アクティブ、と言えはいいのでしようか。神経内科は、さつきも言った通り、初日が決めるんです。確かに、扱う疾患として変性疾患はあります。MS、ALSとか、だんだん悪くなっていくイメージがあるかもしれない。でも、それだけじゃなく、救える疾患をどれだけ救えるかという点も大事になってきます。感染症であるとか脳血管障害とかは急性期が勝負なので。動的な部分をきちんとやっていると、佐賀大学の神経内科の特長だと思

— そうですね、最近後期で神経内科に入室される先生も増えてきていると聞きます。何か教育の面で心掛けてらっしゃることはあるのですか？

— 学生実習の時から連続性をもたせるようにしています。たとえば、学生の段階なら、腱反射が出せた、とかいう段階からですね。病棟実習でのミニ回診のときには、実際の患者さんを診ても

— ありがとうございます。身のことについてうかが

— ありがとうございます。身のことについてうかが

— わせていただきたいと思いますか？

— そうですね、推測小説を読むことかな。当直の間で、呼ばれないときとかに読んでいます。日本ものものが好きかな。翻訳ものだと、マイケルとデイビッドとかつてばつとイメージしづらから。日本人だと、たとえば鈴木さんと山田さん

— そうですね、推測小説を読むことかな。当直の間で、呼ばれないときとかに読んでいます。日本ものものが好きかな。翻訳ものだと、マイケルとデイビッドとかつてばつとイメージしづらから。日本人だと、たとえば鈴木さんと山田さん

— そうですね、推測小説を読むことかな。当直の間で、呼ばれないときとかに読んでいます。日本ものものが好きかな。翻訳ものだと、マイケルとデイビッドとかつてばつとイメージしづらから。日本人だと、たとえば鈴木さんと山田さん

— そうですね、推測小説を読むことかな。当直の間で、呼ばれないときとかに読んでいます。日本ものものが好きかな。翻訳ものだと、マイケルとデイビッドとかつてばつとイメージしづらから。日本人だと、たとえば鈴木さんと山田さん

— そうですね、推測小説を読むことかな。当直の間で、呼ばれないときとかに読んでいます。日本ものものが好きかな。翻訳ものだと、マイケルとデイビッドとかつてばつとイメージしづらから。日本人だと、たとえば鈴木さんと山田さん

— そうですね、推測小説を読むことかな。当直の間で、呼ばれないときとかに読んでいます。日本ものものが好きかな。翻訳ものだと、マイケルとデイビッドとかつてばつとイメージしづらから。日本人だと、たとえば鈴木さんと山田さん

— そうですね、推測小説を読むことかな。当直の間で、呼ばれないときとかに読んでいます。日本ものものが好きかな。翻訳ものだと、マイケルとデイビッドとかつてばつとイメージしづらから。日本人だと、たとえば鈴木さんと山田さん

— そうですね、推測小説を読むことかな。当直の間で、呼ばれないときとかに読んでいます。日本ものものが好きかな。翻訳ものだと、マイケルとデイビッドとかつてばつとイメージしづらから。日本人だと、たとえば鈴木さんと山田さん

— そうですね、推測小説を読むことかな。当直の間で、呼ばれないときとかに読んでいます。日本ものものが好きかな。翻訳ものだと、マイケルとデイビッドとかつてばつとイメージしづらから。日本人だと、たとえば鈴木さんと山田さん

— そうですね、推測小説を読むことかな。当直の間で、呼ばれないときとかに読んでいます。日本ものものが好きかな。翻訳ものだと、マイケルとデイビッドとかつてばつとイメージしづらから。日本人だと、たとえば鈴木さんと山田さん

— そうですね、推測小説を読むことかな。当直の間で、呼ばれないときとかに読んでいます。日本ものものが好きかな。翻訳ものだと、マイケルとデイビッドとかつてばつとイメージしづらから。日本人だと、たとえば鈴木さんと山田さん

— そうですね、推測小説を読むことかな。当直の間で、呼ばれないときとかに読んでいます。日本ものものが好きかな。翻訳ものだと、マイケルとデイビッドとかつてばつとイメージしづらから。日本人だと、たとえば鈴木さんと山田さん

— そうですね、推測小説を読むことかな。当直の間で、呼ばれないときとかに読んでいます。日本ものものが好きかな。翻訳ものだと、マイケルとデイビッドとかつてばつとイメージしづらから。日本人だと、たとえば鈴木さんと山田さん

— そうですね、推測小説を読むことかな。当直の間で、呼ばれないときとかに読んでいます。日本ものものが好きかな。翻訳ものだと、マイケルとデイビッドとかつてばつとイメージしづらから。日本人だと、たとえば鈴木さんと山田さん

— そうですね、推測小説を読むことかな。当直の間で、呼ばれないときとかに読んでいます。日本ものものが好きかな。翻訳ものだと、マイケルとデイビッドとかつてばつとイメージしづらから。日本人だと、たとえば鈴木さんと山田さん

— そうですね、推測小説を読むことかな。当直の間で、呼ばれないときとかに読んでいます。日本ものものが好きかな。翻訳ものだと、マイケルとデイビッドとかつてばつとイメージしづらから。日本人だと、たとえば鈴木さんと山田さん

— そうですね、推測小説を読むことかな。当直の間で、呼ばれないときとかに読んでいます。日本ものものが好きかな。翻訳ものだと、マイケルとデイビッドとかつてばつとイメージしづらから。日本人だと、たとえば鈴木さんと山田さん

— そうですね、推測小説を読むことかな。当直の間で、呼ばれないときとかに読んでいます。日本ものものが好きかな。翻訳ものだと、マイケルとデイビッドとかつてばつとイメージしづらから。日本人だと、たとえば鈴木さんと山田さん

— そうですね、推測小説を読むことかな。当直の間で、呼ばれないときとかに読んでいます。日本ものものが好きかな。翻訳ものだと、マイケルとデイビッドとかつてばつとイメージしづらから。日本人だと、たとえば鈴木さんと山田さん

— そうですね、推測小説を読むことかな。当直の間で、呼ばれないときとかに読んでいます。日本ものものが好きかな。翻訳ものだと、マイケルとデイビッドとかつてばつとイメージしづらから。日本人だと、たとえば鈴木さんと山田さん

— そうですね、推測小説を読むことかな。当直の間で、呼ばれないときとかに読んでいます。日本ものものが好きかな。翻訳ものだと、マイケルとデイビッドとかつてばつとイメージしづらから。日本人だと、たとえば鈴木さんと山田さん

— そうですね、推測小説を読むことかな。当直の間で、呼ばれないときとかに読んでいます。日本ものものが好きかな。翻訳ものだと、マイケルとデイビッドとかつてばつとイメージしづらから。日本人だと、たとえば鈴木さんと山田さん

— そうですね、推測小説を読むことかな。当直の間で、呼ばれないときとかに読んでいます。日本ものものが好きかな。翻訳ものだと、マイケルとデイビッドとかつてばつとイメージしづらから。日本人だと、たとえば鈴木さんと山田さん

「医学生のための漢方医学セミナー」に参加して

吉田 紀子

昨夏、三重県の湯の山温泉で開かれた「医学生のための漢方医学セミナー」に参加しました。このセミナーは、安井廣迪先生が1986年から続けられてきた、漢方中医学を中心としたセミナーです。昨年まではクラシエ薬品、今年からは小太郎漢方製薬が後援下さり、漢方について一通り学ぶ事が出来る夢のようなセミナーです。学生20人強で、弘前から宮崎まで、全国から集まってきました。これに

対し入れ替わり立ち替わり先生方が22人、小太郎製薬のスタッフのみならず、10人程度来て下さいました。

一日の流れとしては表1の通り。授業は多くの場合1コマ1時間で設定され、概論から始まり生理学・病理病機・診断学・治療学と一通りのことを学び、その上で臨床の実例を講義頂きました。また同時に生薬や植物を観察する実習や、実際に自分たちで病態や処方を考える実習も行われました。これらを通して、漢方の全体像を系統的に理解することが出来ました。

授業はもちろん素晴らしいのですが、一番勉強になったのは飲み会などの場において先生方から伺った臨床や人生に対する姿勢でした。例えば、病気でなく患者さん自身に興味を持って(灰本元先生)

臨床の場では迷うこともたくさんあるが、前向きな気持ちで忘れずに(平間直樹先生)

この記事を通してこのセミナーに興味を持たれた方は、是非漢方研究会のメンバーまでお尋ね下さい。

時間	内容
8:00	朝食
9:00	授業
12:00	昼食&休憩
14:00	授業
17:00	夕食&休憩
19:00	授業
21:00	飲み会



〈薬草見学〉 生薬の原料となる植物がどのように生息しているかを観察した。



〈休み時間〉 学生同士で飲んだり、コーヒーを飲んだりしていた。



〈部屋にて〉 短時間でも部屋に戻り睡眠をとる人が多かった。



学生活動紹介

『BLS』・『ACLS』

Supportの略で、一次救命処置と訳されます。医療者だけでなく一般の人でも行つてよい、心臓マッサージや人工呼吸などの方をまとめたもので、近年普及してきたAED(自動体外式除細動装置)の使用もこの中に含まれます。一方ACLSはAdvanced Cardiac Life Supportの略で、二次救命処置のことです。こちらは救急車で運ばれてきた患者さんに対する医療者の対応をま

とめたもので、BLSともども、将来医療者になる私たちにとって必須の知識・技術です。

○「蘇生の会」について

「蘇生の会」は、BLSやACLSの学習会(ワークショップ)を行うサークルです。

主な活動の一つは、一昨年の7月から始めた学内のBLS講習会です。年に3〜4回、主に学内の医学生・看護学生を対象に講習会を開き、受講者には次の回から教える側にもなってもらう、新たな受講者にBLSを教えることもあって、一人でも多くの人にBLSを知ってもらおうと同時に、学んだことを人に教える

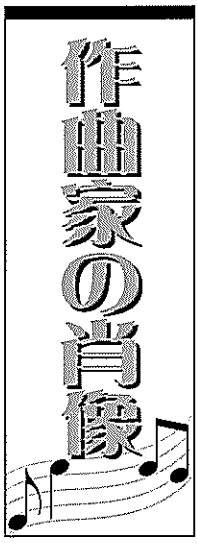
という経験を持つてもらおうことができます。もう一つの活動は、他

○第6回ALL九州ACLSワークショップ

一昨年の春から、年に二回、九州の各大学が持ち回りでACLSワークショップを開催することになっており、佐賀では今年9月に開催が予定されています。毎回100名以上が参加する大規模なイベントなので、

参加した皆さんに楽しんでもらえるよう、準備をしっかりとがんばっていきたいと思います。イベントが近付いてきたら参加者の募集を掲示板などに張り出しますので、興味のある方は是非参加してください。

参加していただきます。(太田)



作曲家の肖像

●グスタフ・マーラー●



北に位置する天山から降りてきた風が容赦なく頬をかすめていく季節は春の幸福感に満ちたあの瞬間を味わうために必要なのだと自らに言い聞かせ続けて早6年。大学の構内は相変わらず寒い。

連載も終盤になって振り返ってみると、好みの偏った記事になっている感はない。ここでマーラーを取り上げるのは偏りに拍車をかける気もあるが、新たな作曲家の音楽に触れるきっかけ

となれば幸い、敢えて書かせてもらうことにした。そういうわけで今回ご紹介する作曲家は、魅惑の人グスタフ・マーラー。大編成のオーケストラから紡ぎ出される、力強く色彩豊かなメロディと、一瞬の静けさの後にささやかなる甘い旋律。そして小鳥のさえずり。体中のあらゆる感情が休まもなく呼び覚まされる、なんとも不思議で魅力的な世界だ。

マーラーは19世紀後半から20世紀初頭にかけてウィーンを中心にヨーロッパ及びアメリカはニューヨークでも活動した作曲家、兼指揮者だった。絵画では「接吻」で有名なクリムトらが前衛芸術に花を咲かせ、音楽

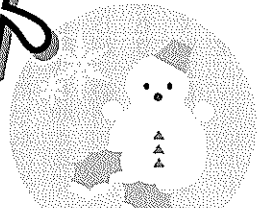
界ではワグナー、ブルックナーが重鎮としてその名をどろどろさせていた頃だ。ユダヤ人として生まれ、家庭的にも恵まれていたと言えない幼少期だったが、早くから音楽の才能はば抜けており、15歳でウィーン国立音楽院に入学。卒業後は指揮の傍ら作曲を手がけた。

そんな彼の作曲の原動力のひとつが妻アルマだった、というのは意外な話らしい。芸術家のひとつの特徴として、母親や恋人など異性に對する憧れが、作品に反映するのはごく自然なことだといえるが、彼のアルマに對する深い愛情と、裏切りにあつたときの悲

さはたまたごとではない。(小池)



クリスマスコンサート



キャロリング 12月16日(水)

毎年恒例の合唱部のイベント。白衣をまとった部員たちが、キャンドルを持って歌いながら病棟を練り歩きました。曲目は「きよしこの夜」「もろびとこぞりて」「グロリア」「かみのみこは」「ノエルの天なる神にも」「まぎりと羊を」など。患者さんの反応は上々で、一曲終わるごとに大きな拍手が上がりました。「有り難いね」と手を合わせて聞く方もいて、アッコの声も上がりました。それまで走り回っていた子供たちも、歌が始まると熱心に聞き入っていました。部員の話では、「今年はいよいよという気持ちで、例年以上に熱を入れて練習を重ねてきました。喜んで頂けて良かったです」とのことでした。

クリスマスコンサート 12月21日(月)

病棟一階ロビーにて、混声合唱。恋人がサン病棟イベント企画サークルSMILEの主催で行われました。今年も学生ボランティアの協力で多くの患者さんが集まりました。宮崎病院長の挨拶に始まり、まずは合唱部による「夜の星を」とクリスマス混声合唱。恋人がサンペリをバイオリン、フルート、チェロ、クラリネット、ピアノ伴奏で演奏しました。最後は皆で「きよしこの夜」の大合唱。一足早いクリスマスに患者さん方も皆満足して帰って行かれたようでした。(日高)

本学卒業生一期生の戸田編集長を迎えての第2号となったMudskippers。2010年の最初は昨年10月に就任された佛淵新学長にインタビューをお願いし、抱負を語っていただいた。また、医学部も学部長が交替し瀧崎新学部長にお話をいただいた。昨今の政治・経済・科学に関する内外の報道をみていると、日本のみならず世界全体が大きく変わろうとしていると感じられる。その中で大学も変革を求められているのは間違いないが、今後のような方向に行くのか不透明な中で舵取り

は、慎重さと大胆さが同時に求められる。また学生の皆さんにとっても教育カリキュラムも大幅に変更されて、学生にも教員にも新しい試みとなる。お互いに手探りの部分があり、これまで通用していた意識や方法が役に立たないといった場面が出てくるかもしれない。そのような中で新しい道を求めて行くには困難は伴うだろうが大学のキャンパスライフの主人公である学生の皆さんの貢献は欠かさないと思う。大学で生きていく教員・職員と学生の相互作用の中から新しい芽が出てくることを期待したい。(尾崎)

新聞編集委員
戸田修二教授(編集委員長)
池田豊子教授、内川洋子准教授、尾崎岩太准教授
北村浩晃、小池このみ、日高駿、森永久美子(医6)、川良智美、北島慶子(医5)、榎戸翠、太田美穂、徳田悠希子、横山加奈子(医4)、野上愛、吉田紀子(医3)
棚町豊二(マルチメディア支援室)
荒川孝範(学生サービス課職員)
要望などの連絡先 荒川 arakawat@cc.saga-u.ac.jp

